

地域課題に目を向けた 在学3年間の取り組み

山田高校の「ふるさと探究」は、平成30年度に同校が立ち上げた独自の学校設定科目をもとに、現在は「総合的な探究の時間」に全校生徒が学ぶ取り組みで、在学期間の3年間を通して地域課題の発見とその解決に向けた探究を行うものです。

令和元年度からは、報道機関、通信事業者などと協働し、1年生

で「碑の記憶」、2年生では「復活の記憶」をテーマに過去の災害の歴史や東日本大震災からの復興状況を学び、3年生では、そこから見えてきた地域課題を「高校生議会」の場で行政に提言しています。

在校生の約9割が町内出身者の同校では、この多様で主体的な学習を通じて、生徒らが地域課題に目を向け、自分たちの学びの成果をこれからのまちづくりに生かそうという意識が高まっています。

実践①

災害の記憶を後世に伝える 「碑の記憶」

同校の1年生で取り組む「碑の記憶」では、町内に現存する明治29年の明治三陸地震、昭和8年の昭和三陸地震津波、昭和35年のチリ地震津波の被害状況や教訓などを記した12基

の石碑から津波被害の歴史や教訓を調査しています。さらに、これらの災害の記憶を後世に伝える手法として、インターネット上のデジタル地図を活用し世界中に公開。年次ごとに更新を続けてい

ます。

取り組みが始まった令和元年度は当時の1年生31人（今の3年生）が、新聞記者を講師に招き、過去の新聞記事などから明治や昭和に襲来した津波や平成23年の東日本大震災大津波での被害の甚大さを学習。同記者から取材の手法なども学び、石碑や周辺の現地調査、地域の語り部から体験談などの聞き取り調査を行いました。

調査結果は、手書きで新聞記事形式にまとめたほか、インターネットサービス会社の指導の下、デジタル地図を作成し、



地域の語り部からの聴き取り調査



調査結果は同校のホームページから確認できます

石碑の建立位置や記されている碑文の内容などを同校のホームページで公開しています。

生徒らの取り組みで、本町の先人たちが石碑に託した思いが

ひも解かれ、現代に見合う形で災害の歴史を語り継ぐ手法が示されたほか、生徒自身が災害の記憶を次世代へ伝えていく「語り部」の一人になっています。

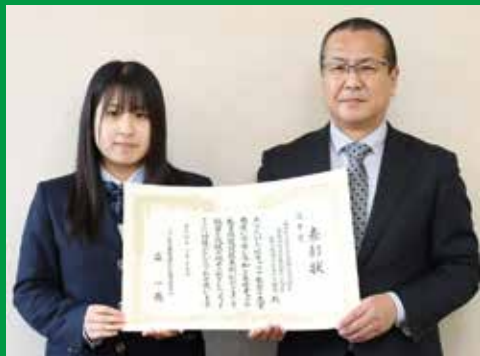
実践②

復興への道しるべをたどる 「復活の記憶」

2年生で取り組む「復活の記憶」では、東日本大震災で壊滅状態となった本町がどのような復旧・復興し、どのような課題を抱えて

いるのか、町の事業の進捗状況や地元企業の震災後の歩みなどをたどりながら学習しています。

昨年度は、当時の2年生31人（今の3年生）が、東日本大震災で被災し、10年ぶりに海水浴場



受賞者代表の同校前生徒会会長佐々木海音さん(写真左)と晴山 俊 校長(写真右)



議場での質疑応答の様子



オランダ島での聴き取り調査

実践③

「高校生議会」

まちづくりへの提言

3年生で取り組むのは、3年間の学びの集大成を町へ提言する「高校生議会」。「ふるさと探究」の立ち上げの年から毎年行われているもので、校外調査の結果などを踏まえ、グループごとに質問内容を練り、町長をは

じめ、町幹部職員を相手に議会の「一般質問」形式で議論を交わします。本年度は、3年生32人が8グループに分かれ、事前に地域防災や震災の教訓伝承、廃校舎の活用など、多岐にわたるテ

作成や防災減災ツアアの開催」を提案。これに対し、佐藤町長は「町内に存在する石碑や碑文は、先人が後世の私たちに震災の記憶と教訓として示したもので、現在の私たちも次の世代に継承していかなければならない。同パンフレットの作成や今後計画する『歴史講座』でのツアー実施などの中で取り組んでいきたい」と答弁しました。生徒らが積み上げてきた知識

町では、町内で学ぶ子どもたちの教育環境の充実に向けて今後も同校との連携を密にし、入学者数の減少が課題となっている同校のさらなる魅力向上を支援していきます。

町では、この取り組みで島内避難にかかる時間の実測データなど、今後の参考となる資料を得ることができました。

調査結果は、現地の写真を交えながら、当日行われた町主催の島内避難訓練での考察と合わせて、同校のホームページに掲載されています。

が再開したオランダ島で校外学習を行いました。生徒らは、事前に過去の新聞記事から島の歴史や被災状況などを学習。現地に同行した町職員らへの聴き取りを通して、復旧までの経緯や活用策の方針などへの理解を深めました。

山田高校「ふるさと探究」が全国優秀賞

震災教訓つなぐ学び脈々と

山田高校(晴山 俊 校長・生徒90人)と町との連携協定の下で取り組む「震災伝承とふるさと探究」が、国の第10回キャリア教育連携推進表彰で優秀賞を受賞しました。この取り組みは、同校生徒らが町や各関係機関、地域住民の協力を得

ながら、在学する3年間を通して本町の災害の歴史を学び、自らが未来に向けた震災伝承とまちづくりを考え、実践しているものです。ここでは、同校の生徒らが取り組む「ふるさと探究」の模様を紹介し

マで校外調査を行い、その調査結果と地元事業者への取材や町職員とのワークショップなどを通して質問内容や提案をまとめました。

1月18日に開かれた同議会では、各グループを代表して議員を務めた8人と補佐人8人が議席に着き、昆暉雄町議会議長が議事進行。佐藤信逸町長や佐々木茂人教育長の答弁に熱心に耳を傾け、メモを取りながら、再質問を行うなど本会議さながらの質疑応答が展開されました。

今回の受賞では「ふるさと探究」の取り組みが、将来にのめ目を向けるキャリア教育ではなく、過去の教訓から未来を見通す学びが展開されていることや、県立学校でありながらも、立地する町との連携した教育体制が高く評価されました。

町との連携が高く評価 同校の魅力向上支援へ

や知見は、この取り組みを通して町に届けられ、町事業への反映も検討されています。当日の質疑応答の内容は「やまだ議会だより特別号」をご覧ください。